

兵庫・明石城武家屋敷跡

あかし
じょうぶけやしき

がある程度明らかになつた。屋敷溝や門の検出から、文久年間の絵図との比較もでき、出土遺物の中に焼き継ぎ時の文字が残っていることから、屋敷名やその広さ、位置が確定できるようになつた。

1 所在地 兵庫県明石市東仲ノ町

2 調査期間 一九九九年（平11）四月～八月

3 発掘機関 明石市教育委員会

4 調査担当者 渡辺 昇・高木芳史（兵庫県教育委員会）

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

明石城は小笠原忠政（忠真）が明石藩主として転封されたことに伴つて、元和三年（一六一七）から構築された。それに伴つて地形

敷地南側の池から出土している。池は近代になって廃棄場所となつたようで、その中から出土している。(3)は市川家に位置する地点で、北側部分の落ち込みから出土している。

また、三好家に相当する屋敷中央の井戸から、「中宋」の焼印の押された円形容器の蓋が出土している。四枚の材からなり、接合は木釘によつている。中央やや右側に焼印が施されている。厚いことから通常の曲物の蓋ではないと思われる。(3)に近接する溝から、焼印で記号が押された、栓か工具の歯と思われるものが出土している。歯部分は断面円形であるが頭部は断面方形である。同地点から数本の同形の遺物が出土しているが、他には焼印は存在しない。

8 木簡の釈文・内容

池跡（松本家）

(1) 「○阿□□。」

(2) 卍

360×72×8 011

径57×長(114) 061



(明石・須磨)

かく、江戸時代の屋敷割り
分の調査が実施できたこと
から、江戸時代の屋敷割り

落ち込み（中川家）

114 061
径57×長(114) 061

(3) 「。大」

146×(78)×5 061

(1)は完存に近い板材で上下に留めた孔が認められる。右側部にも穴が二ヵ所存在する。(2)は栓の頭部に卍の記号が墨書きされている。

頭部が大きく断面は円形である。(3)は刷毛本体で、ハケ部は残存していない。柄中央に円孔があり、その下に墨書きで記されている。刷毛は縦方向に割って挟み込むものである。

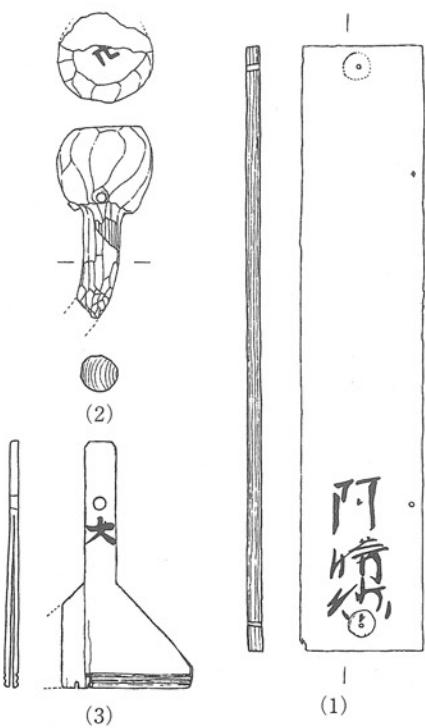
9 関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成一一年度年報』

(一〇〇〇年)

明石市教育委員会『平成一一年度文化財年報』(一〇〇一年)

(渡辺 昇(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所))



兵庫県城崎郡日高町発行

「但馬国府と但馬国分寺」

—発掘調査からその謎に迫る—の刊行

『但馬国府・国分寺の発掘調査成果をビジュアルにまとめた
木簡学会但馬特別研究集会にあわせて刊行された。遺構・遺物
の写真・解説の他、古地図などの関係資料も総合的に集められ
ている。木簡もカラー写真で多く所収され、墨書き土器の写真も
収められている。

A4版 総カラーページ一〇〇二年七月刊行

価格 二〇〇円(送料三〇円)

申込先

日高町教育委員会社会教育課

兵庫県城崎郡日高町称布九二〇

TEL ○七九六一四一一一一(代)

FAX ○七九六一四二一一〇一四